

30年間、わたしの仕事はどう変容したか

会員が語るネット社会への体験

いま、わたしたちはどのような時代に生き、科学・技術を伝える仕事を行っているのだろうか。JASTJ設立後の科学ジャーナリズムを振り返るなかで、未来への展望を探そうと、会員対象に行ったアンケートの回答を読み取りながら、30年誌編集に向けた議論を紹介する。

●ITの影響、30年の変容さまざま

「アンケートの回答で特に印象的だったのは『デジタルやインターネットが自分の情報発信にどんな影響を与えたか』をテーマにした質問への回答です」と話すのは、編集メンバーでウェブメディアに詳しい亀松太郎さん。「日本のインターネット元年とされる1995年に触れている人が多いが、個々の回答者が言及している時期や体験はバラバラで、人によってデジタルやインターネットとどう関わってきたかが異なっているのが興味深いです」という。

回答者30人から、通信技術の導入・普及に従って仕事が大きく変わった経験が伝えられた。確かに体験の仕方は所属組織、時期、世代などによってさまざまである。「年表」がつかれるように、できるだけ時系列に並べると—

「1979年から米国の統計解析ソフト（SAS）を使った仕事。SASでインターネットとパソコンを使った仕事を始めたのはWindows 95から。インターネットで機械学習関連の記事を書いたのは2017年から」（データサイエンティスト）。

「1993年、電機メーカーにて業務効率化でPCが社員全員に配布され、資料作成やイントラネットに使われ始める」（サイエンスライター）

「1995年、Windows 95の登場とともに。日々書く原稿が紙面になるフローが変わった。情報収集の手法も徐々に変わっていった」（元新聞記者、大学教員）。

「在米勤務の1990年代半ばから後半にかけてインターネットが普及、会見場などに行かなくてもネット上で公開されるプレスリリースを基に書けるようになり、便利になった一方、直接対面の機会が減った」（科学ジャーナリスト）

「インターネット元年は、Windows 95の発売年。

1月の阪神淡路大震災の状況の発信やボランティア募集では、パソコン通信とインターネット（音声モデムを用い、パソコン通信ネットを経由して使用するのが一般的）が活躍。新しい可能性を示しました」（フリーライター）。

「2000年ごろにインターネットで検索し、資料を閲覧できるようになった。メールで連絡を取れるようになったことが、取材や記事執筆の効率化に繋がった」（フリーランス記者）

「2004年。PC、ネットのおかげで本を書く」（コンサルタント）

「2005年、youtubeが登場し、ビジュアル（イラスト）専門にシフトした」（イラストレーター）。

「2018年。それまでネット記事は紙媒体の記事の二次利用だったが、その年からオリジナルのネット記事を作成するようになった」（出版編集者）

●読み取れた特徴

仕事の変容にいくつかの特徴があった。

1) 海外と日本の違い

1998年ごろ、学会発表の抄録の提出では紙の使用がなくなり全てインターネットのウェブ上での作業だったという会員（医師）は海外から帰国し、都内の私立大学勤務に戻ったが、「大学にはまだインターネットの設備がなく、研究成果発表の申込さえできないほど、日本は遅れていることに唖然」としたとの回答。

2) 新聞かWebか

「新聞記事は多くの人に関わって作り上げるが、ウェブ記事は基本的に一人の編集者が最初から最後まで責任を持つ。文字数に制限がないなどの差はもちろんあるが、この点がもっとも大きな違いだった」と元新聞社論説委員。

「ネット記事では紙媒体で得られていたほどの収入が期待できないため、原稿料は安くなり、質の高い記事を提供したい編集者・書き手としては見合わない仕事になっていく。そのジレンマは今なお続き、世の中に本当に必要なことを伝える環境が失われていくことを懸念する」編集者。一方、「WEB媒体で、調査やインタビューを重ねたまとめものも工夫次第

で読まれる」(ジャーナリスト)動きもでている。

3) 世代の違い

年齢の違いによって職場環境が異なるだけに、30代の記者は「記者職に就いた時点(2019年)でインターネットが普及していたため、変化を経験していない」。また50代のテレビ局の報道系ディレクターは「仕事を始めた1992年、インターネットなどを活用していたので、デジタル化やインターネットで大きく変わったという記憶はない」という。

● JASTJの設立、「ネット元年」から10年後

JASTJ設立から10年後の2004年、10周年記念に『科学ジャーナリズムの世界』を発刊した。日本の「インターネット元年」からもほぼ10年の時期。中古書となった同書を読んだ亀松さんは、インターネットが科学ジャーナリズムに与える影響についてほとんど議論されていないのが気になったという。「一部の筆者(森山和道さんとJ・コーネルさん)がインターネットによるメディアの変化に注目しているだけ。当時の大手メディアで働くジャーナリストにとってインターネットの存在感はまだ小さく、その後、誰もがSNSで手軽に情報発信できる時代がやってくるとは、想像できなかったのではないのでしょうか」と分析した。

ここで弁明的な補足解説をすると、その前年の2003年、JASTJは会則を大改正して、会員の資格を科学ジャーナリズムや科学コミュニケーションに関心のある人であればだれでも入会できるよう門戸を開いた。新聞、放送、出版なので大組織所属の会員から、フリーランスや科学コミュニケーターの参加がしやすくなったばかり、変革期の最中である。

この時期に通信手段にメールを使うようになり、2002年に科学ジャーナリスト塾を開講、2003年には熱意ある若手会員の貢献によってホームページも出来上がった。10周年を期に科学ジャーナリスト賞の募集も開始。ただし月例会の様子をビデオで収録、youtubeで会員に配信するようになったのは、2013年12月例会(「災害と公衆衛生」;講師は越智小枝さん)から西野博喜さんの奮闘によるもので、JASTJもインターネットによる「発表の場」をつくりだしてきた。

● AI社会に批判的な視点

「デジタル化やAIの活用が進むなかで、あなたの仕事やこれからの社会の在り方について、どのような期待、希望、展望、将来像などをお持ちですか」

との問いの答えも興味深い。

30周年編集チームの宮野きぬさんは「便利になる、社会変えるだろうといった肯定的な回答が比較的多かったが、一方、社会が分断するとか、誤情報、偽情報が増えていくだろうという現代の社会問題に通じるところに引きつけたジャーナリストらしい批判的な視点に注目した」という。

例えば、「AI技術は先進諸国の経済と文化を破壊する危険性が高い」(Yさん)、「社会はITCリテラシーによる格差が広がる」(Mさん)、「分断がますます進む/広大な情報のなかで自分が気に入る情報だけを取り上げる人たちがバラバラに存在する社会の像が思い浮かぶ」(Tさん)、「懸念するのは、悪意を持った、意図した偽情報や偽動画による混乱です」(Uさん)という未来予想である。

● インターネットのない時代の「前史」も記したい

編集チームの高木鞠生さんは、「私の年代だと原稿用紙に書いて赤字を入れられ、原稿の送り方もオートバイによる定期便からFAXへと、どんどん変わっていった。若い人にはほとんど想像できないかもしれないが、取材もこういう話題だったら誰にあたればいいだろうかと、大学の紀要や学会の予稿集を見て探し、研究者に電話でコンタクトしていた。インターネットのある今とはまったく違う。そういう時代にどのように記事が作られていたのか、30年史の、いわば『前史』を記しておく必要もあるのではないか」と話す。

新聞業界の技術革新が進むときに仕事をし、災害報道を重ねた経験の持ち主の井上能行さんも1977年の入社当時、原稿はざら紙と呼ばれる質の悪い紙にボールペンで書いた。長崎県の雲仙・普賢岳で大火砕流が起きた1991年6月、大火砕流の発生を知って九大の火山観測所から待たせていたタクシーに乗って近くの公衆電話に向かった。後から応援で来た記者は社有の携帯電話を持っていた。1995年の阪神大震災では、ノートワープロ(パソコンではない)で原稿を書き、終わるとワープロを抱えてISDN公衆電話に行って原稿を送ったという。

「インターネット元年」と呼ばれるこの年、社内でインターネット信奉者は明るい未来を、懐疑派は危険性を主張していた。井上さんは「AIも含めて技術の社会的受容は『ラッダイト』(19世紀初頭にイギリスで起きた機械破壊運動)の時代から続く課題なのかもしれない」とネット導入時の経験をAI時代に向かううえで参考にできないかと提言する。

(30周年記念誌編集チーム)